

音楽リズム遊び

幼児教育学科 青 山 雅 哉

幼児教育学科 小 川 純 子

I. はじめに

私たちは、それぞれ幼い頃から様々な形で音楽に関わってきている。子どもにとって音楽は生活の一部と言える程、重要なものである。

ここでは、子どもが楽しんで音楽に触れる事の出来る「音楽リズム遊び」に焦点をあて、リズムについて考察し、そして授業や講座での「リズム遊び」の実践を検討しながら、子どもの音楽的発達の過程に応じた音楽的指導方法について研究を進めていきたい。

II. リズムについて

時間軸の中に、ある秩序が組織された物がリズムといえる。音楽を聴くとき、人はその流れにある秩序を感じ取り、その中で音楽の理解をさらに深めていくことができる。

「音の流れを音楽として認識するためには、私たちの心内に、音楽的構造をとらえるための“知覚的体制化”の処理が必要である⁽¹⁾」といわれている。

音楽は、絵画が「空間芸術」であるなら「時間芸術」ともいえるものであり、その時間的秩序を組織するリズムは音楽の根幹となるものである。

「リズム」とは本来音楽用語であるが、それが時間の秩序を表すものとして様々な事柄に用いられている。生物自身の持つ「生体リズム」、人間の活動に関わる「生活リズム」、人類のコミュニケーションにおける「言語リズム」等、日常的に様々な用語が使われ、また新たに造られてもいる。

自然界の出来事はすべて時間的な軸で変化しており、あらゆる生物も、時間の進行とともに行動し成長している。つまりリズムは生物の生存の基本に深く関わっているものといえる。

もちろん人間自身にも規則性をもったリズムがあり、人間がその環境に適応し生存していくためには、その環境における事物や事象の変化をもったリズムに、自らのリズムを合わせていかなければならない。そのためには、変化の時間の長短を知覚し、自らの行動の時間的な変化を調節していく必要がある。このことは、リズムの知覚と同期といえるが、そうしたリズムの知覚と同期への能力は、地球環境に生物が適応するための本質的な能力ともいえる。

さらに、自然環境の事物や事象の変化に人間が適合させていくことだけでなく、人間同士がお互い

にリズムを合わせていくことは社会生活にとって大切な事柄でもあり、生きていく上での基本的なものともいえよう。

音楽は人類の生み出したものであるが、その根幹となるリズムを研究するにあたり、音楽面のみではなく幅広い分野においての考察していくことも必要かと思われる。

Ⅲ. 音楽リズムの特徴的メソッド

幼児期における音楽の導入として、リズム遊びを用いた特徴的なメソッドに「リトミック」と「オルフ・シュールヴェルク」という代表的な教育プログラムがある。ここにその特徴を示していきたい。

●ダルクローズの『リトミック』

エミール・ジャック＝ダルクローズは、スイスの作曲家であり、身体運動を取り入れた新しい教育法「リトミック」の考案とその実践と普及に活躍した音楽教育家である。

リズム運動が音楽への導入として最も良い方法であり、「生活と最も関連した」反応であると述べている。

リトミックの目的は、子ども達が身体表現を通して、音楽のあらゆる要素を知覚、表現し、理解することを発達させることである。心に形作った概念を身体表現することで、心身の豊かな発達への相互作用も示され音楽分野のみではなく、幼児を健やかに育む総合的な教育プログラムとなっている。

●カール・オルフの『オルフ・シュールヴェルク』

カール・オルフは現代ドイツを代表する作曲家であり教育者、音楽学者でもあった。「オルフ・シュールヴェルク」とは創造的な音楽性を教育の柱に、試行錯誤を重ね長い時間をかけ、出来上がった子供のための教則本（1950～54年にかけて出版）である。「動き、舞踏、言葉と一体になった基本的な音楽」を創造性と即興をもった表現力を発達させることで、あらゆる教育の上で生かされていくことを述べている。

「オルフ・シュールヴェルク」では、話ことばをリズム化し、音声を音素材の一つと捉えて音楽を作り上げる素材として指導に活用するなど、「ことば」を教育の出発点としている。さらに、手拍子、足拍子、ひざ打ちなどで音が出せる身体をも一つの楽器として捉え、ことばと体を直結させた模倣や即興応答などさまざまな「リズム遊び」をとりあげている。「動き」を即興し、テーマに合わせて躍り、音楽の伴奏をつけて完成させる。オルフは、「ことば、リズム、動き」を重要だと考えていた。オルフ・シュールヴェルクの目的は、「創造性を重視した音楽の基礎指導」であるといえる。

IV. リズム遊びの実践と考察

次に、これらのメソッドより学んだものから、「リズム遊び」を工夫考案し、実践をとおしてその反応や効果について検証していきたい。

1の対象者は乳幼児から学生、大人と幅広くなっているが、2の対象者は子ども達を指導する立場の大人である。現場での指導方法を互いに積極的に学ぼうとする意識が高く、「リズム遊び」での教育的意味をある程度説明、理解した上での実践となっている。

1 「おうむ返し」を応用したリズム遊びの実践例

乳幼児は、周りの人達の声を聞き、真似をして言葉を覚えていく。と同様に、子供自身の中のリズムも模倣を重ねることにより、増やすことも出来る訳である。先に打つリズムを真似して応えるという、いわゆる「おうむ返し」を応用してのリズム遊びの実践例を述べる。

①まねっこでリズムリレー

ア、お互いが良く見えるように、大きな円になる。

イ、最初の人4拍のリズムを叩く。全員でそれを真似、次は隣の人が・・・と繋げていく。

ウ、一週目は手拍子でリズムの変化を楽しみ、慣れてくると叩く場所を体全体に広げ、体全体を使って楽しむ。

エ、決まり事として下記を確認して始める

- 4拍子である。(慣れてくると3拍子にも挑戦する)
- 前の人と同じリズムで叩かない。
- 出来るだけ、叩く場所を変化させる。
- リズムが思い浮かばない場合も、四分音符を重ねるだけでよいから流れを止めない。

◎この遊びには自然にリズムを増やすという効果がある。前の人と違うリズムを考えたり、知らないリズムを模倣したりするうちに自然に体の中のリズムが増えていく。ただし、どうしても同じリズムになりがちなので、似たリズムが続く時は、指導者が輪の中に入り自然な形で新しいリズムを叩くことが必要であろう。

②「やまびこさん」の歌を使ってのまねっこ遊び

この遊びでは、遊びの中で言葉のリズムを見つけ、さらに体のあちらこちらを叩くことにより、体全体を使ってのリズム遊びに発展させる。

ア、リーダー（指導者）が最初に歌い、続けて参加者（幼児）がその言葉を真似て歌う。

イ、次に、歌詞の言葉一つ一つのリズムを見つけ、それを手拍子で打つ。

ウ、手拍子を更に発展させ、胸、おなか、ひざなど体のあちこちを叩く。叩き方も両手打ちだけでなく片手ずつ交互打ちも行う。

やまびこさんリズム譜

作詞 おうちやすゆき

やまびこさん やまびこさん まねっ ござん まねっ ござん

5
ヤッ ホー ヤッ ホー ヨ ホ ホ ホホー ヨ ホ ホ ホホー

9
エ ^^ ^^ ^^ ^^ エ ^^ ^^ ^^ ^^ まねするな まねするな

◎この遊びは、歌を通じて自然にまねっこ遊びに入ることが出来る。また言葉のリズムも分かりやすく、単なる手拍子から体全体を楽器と考えると打つ（いわゆるボディパーカッション）遊びに発展させることも容易である。また、例えば人の名前や食べ物の名前というふうには、歌詞を変えることにより身近な人や物に関わる言葉に興味を持たせ、そこから言葉のリズムを感じさせることも出来る。

2、「ボイス・アンサンブル」を使って言葉のリズムを感じる

リズムを体で表現する遊びを楽しむ子ども達の中には、楽器の演奏は苦手でも音で表現するのは大好きという子どもが沢山いる。同様に歌う事が苦手でも人前で歌いたがらない子どもにも、自分の声で表現する事は大好きという子どもが沢山いる。誰でも大きな声で言葉のアンサンブルを楽しめるように、友達の名前や身近な物の名前などを取り入れ、生活の中の言葉にもリズムがある事を感じることができれば、生き生きとリズムにのったボイス・アンサンブルを楽しむ事が出来る。

「実践方法」

ここでは、4～5人の人数での実践例を述べる。

- ①グループ毎にテーマを決める。
- ②テーマに沿った言葉を人数に応じて数点選ぶ。
- ③基本の拍子を設定。
- ④それぞれの言葉に合ったリズムを考え、それを基本のリズムとする。

⑤言葉に音程は付けませんが、声に高低を付けると面白い変化が出るので、どの言葉を高くするか低くするかを考える。

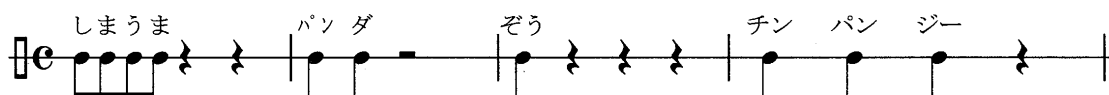
⑥応用として、楽器をイメージする、アクセントを上手に使う、強弱をつけるなどを考える。

「実践例」

①テーマ「動物園へ行きましょう」

素材「しまうま・チンパンジー・ぞう・パンダ」

この言葉の基本リズムは下記のリズム譜である。



このまま全て1拍目に入れるだけでは変化がないので、休符の位置を工夫する。

動物園

5

しましましましま しましましましま しましましましま しましましましま

チンパンジー チンパンジー

ぞう〜 ぞう〜

パンダ パンダ パンダ パンダ

◎言葉のリズムが分かりやすく特徴もあるので、簡単にとても楽しめる。「ぞう」を「ぞう〜」などと、本来の言葉のリズムを少し変化させるだけでも面白くなる。また声の高さを極端に上げたり下げたりすることによりコミカルさが増し一段と楽しめる。

②テーマ「日本の夏」

素材「蚊・蚊取り線香・うちわ・金魚・風鈴」

日本の夏

ff

かかかか かかかか かかかか かかかか かかかか

かとりせんこう かとりせんこう かとりせんこう

う ち

6

pp

か か か か か か か か か か か か か か

かとりせんこう かとりせんこう かとりせんこう

わ う ち わ う ち わ

f

mp

ふうりんりんりん ふうりんりんりん ふうりんりんりん

11

か か か か か か か か か か か か か か

かとりせんこう かとりせんこう

きんぎよ きんぎよ

きんぎよ きんぎよ きんぎよ きんぎよ きんぎよ

ふうりんりんりん

16

か か か か か か か か か か か か か か

かとりせんこう かとりせんこう かとりせんこう かとりせんこう

mf

う ち わ う ち わ

き んぎよ

mp

りんりん

mf

ふうりんりんりん

21

ふう りん りん

◎「かとり」の言葉を3連音符と感じた作り方になっているがとても良い効果をあげている。

うちわは言葉と物のイメージ両方からゆったりとした二分音符を使っている。蚊取り線香がクレッシェンドすると蚊のパートがデクレッシェンドする、またうちわがあおがれると風鈴が鳴るといふ非常に凝った作りである。

③テーマ「コスメ」

素材「化粧水・ファンデーション・チーク・シャドー・つけまつげ・ビューラー・グロス」

コスメ

Musical notation for measures 1-4. The top staff (treble clef) contains the melody with lyrics "けしょうすい" (keshousui) under the first two measures. The middle staff (treble clef) contains the accompaniment with lyrics "ファンデーション" (fandeshon) under the third and fourth measures. The bottom staff (treble clef) contains the bass line.

5

Musical notation for measures 5-8. The top staff (treble clef) contains the accompaniment with lyrics "ファンデーション" (fandeshon) under the sixth measure. The middle staff (treble clef) contains the bass line with lyrics "チーク チーク" (cheeku cheeku) under the fifth, seventh, and eighth measures. The bottom staff (treble clef) contains the melody.

9

Musical notation for measures 9-12. The top staff (treble clef) contains the melody with lyrics "シャドー" (shadō) under the tenth and eleventh measures. The middle staff (treble clef) contains the accompaniment with lyrics "ファンデーション" (fandeshon) under the ninth measure and "シャドー" (shadō) under the twelfth measure. The bottom staff (treble clef) contains the bass line with lyrics "シャドー" (shadō) under the twelfth measure.

13

つけまっげ つけまっげ つけまっげ

シャドー ビュラー ビュラー ビュラー

17

つけまっげ

ファンデーション ファンデーション

ビュラー

21

sfz
グロス

sfz
グロス

sfz
グロス

◎今の日本ではカタカナで表される言葉はとても多く、リズムも様々に捉えられる。例えばチークであれば「ちーク」か「ちいく」か、またシャドーであれば「しゃどー」か「しゃどお」か感じ方は違う。その辺りは無理に統一する必要はなく、普段使っている言葉のリズムで表現すればスムーズである。最後の小節を休符でたっぷり間を取り、強く「グロス」と入れたのはとても印象的であり、又効果的である。

V. 音楽リズム遊びの問題点と課題

音楽リズム遊びを指導する上においては、その内容と方法が画一的であったりするが、単に技術的な向上を求めたりすることが目的ではない。リズムの反射や反応のための訓練的な方法で行ったりするのではなく、音楽的な表現能力を発達させ、さらに子どもの自己表現力を総合的に発達させるための内容と方法でなければならない。

幼児期は運動のリズムと音声リズムとが一体となっている。リズムの表現は子どもの心内に時間的・空間的秩序をつくり出し、創造的運動や同期的運動を伴うことで豊かな表現力を養っていくことができる。

フレーベルが「人の教育」の中で、「それぞれの段階にふさわしい要求に適したことをさせるべきである。それによって、健全な蕾から新しい芽が萌え出るように発達をとげて行くのであろう。」⁽²⁾と述べているように、子どもの豊かな表現力が自然に発展していくためには、即時に適切な刺激やアドバイスを提示できるような即興的指導が必要であり、今後そのためのスキルアップを図っていかなければならない。

VI. おわりに

「音楽リズム遊び」は、子どもが遊びという活動の中から、自然に音楽を楽しみ親しんでいく一つの有効な手段であること。そして、子どもの知覚、身体、情操など心身のあらゆる発達に大きくかかわっていること。また、そのためには子どもの発達の過程に応じた適切な指導をする事が重要であるということも分かった。

保育者はその指導の内容や方法を、常に実践での観察をとおして創意工夫する必要があると考える。

今後、対象年齢に応じた段階的で組織的なプログラムの作成を継続して検討し、幼児教育の現場で生きた形で活用出来るようにしていきたい。

- 引用文献 (1) 阿部純一 1987 旋律はいかに処理されるか 波多野誼余夫(編)
音楽と認知 東京大学出版会
(2) 荘司 雅子 1975 フレーベルの生涯と思想 玉川大学出版部

- 参考文献 谷口高士(編著) 2000 音は心の中で音楽になる 北大路書房
小泉恭子 いろんな音をさがしてあそぼう 明治図書
山田俊之 リズムで遊ぼう 音楽之友社
柳沼てるこ リズム・ムービング 音楽之友社